

# 4

[報告 | report]

## 米国の認定アーキビスト・アカデミー(ACA)について

認定試験を受験して

Introduction to the Academy of Certified Archivists through an Experience of Taking the ACA Examination

筒井弥生 | Yayoi Tsutsui

### 1 — はじめに

2012年度、いよいよ日本アーカイブズ学会(JSAS)登録アーキビスト認定制度<sup>[1]</sup>がスタートする。戦後すぐの史料保存運動から数えても数十年、関係者の努力がついに開花するこのときを、第6条1号による認定の最前線にいるアーカイブズ学専攻出身者のひとりとして心から祝福したい。ここに至るまで、様々な議論の積み重ねがあったことであろう。なかでも、2011年夏のJSAS研究集会<sup>[2]</sup>では、小川千代子氏が、質問に答える形で、ご自身の持つアメリカ合衆国(以下米国)の認定資格について発言された。長年の経験と大変な書類仕事によって手に入れる資格という印象をもった。たまたま米国の資格に関心をもつ学生仲間があったので、この後に出かけた米国アーキビスト協会(the Society of American Archivists以下SAA)<sup>[3]</sup>シカゴ大会の折に、米国のアーキビスト資格を司るアカデミー・オブ・サーティファイド・アーキビスト(the Academy of Certified Archivists以下ACA)<sup>[4]</sup>のブースに立ち寄り、担当者の話を聞いた。

本稿では、米国におけるアーキビスト認定制度について、専門職団体であるSAAの活動をふまえて、認定機関であるACAによる資格認定について、筆者の体験も含めて簡単に紹介したい。

### 2 — 米国の専門職団体とアーキビスト養成

米国において国立公文書館が設立されたのは、ヨーロッパ諸国からみると後発で、1934年のことである。当時は大恐慌のさなか、ニューディール政策の一環で1935年にWPA(Work Progress Administration)が立ち上げられ、歴史記録調査も行われた。そのような背景をもって、米国の専門職団体SAAは1936年に結成され<sup>[5]</sup>、2011年シカゴ大会で75周年を祝った。筆者は、2009年オースティン大会に、その前年テキサス州立大学オースティン校から来日し、アーカイブズ学専攻で特別講演をしてくださったデビッド・グレイシー先生の強いお勧めで学習院の方々と一緒に以来、毎年SAA大会への参加<sup>[6]</sup>を楽しみにしている。

このSAAが大学院でのアーキビスト養成の教育ガイドライン<sup>[7]</sup>を策定している。テキサス州立大学オースティン校、ミシガン州立大学、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校などの大学院にアーキビスト養成のコース<sup>[8]</sup>がある。テキサス州立大学の修了生と話をした際、聞いたところによると、アーキビスト職へ就くのはなかなか厳しい状況にあり、なかにはまずレコード・マネージャーとして経験を積むという人もあった。しかし、インターンシップの機会が多く、SAAの求人情報<sup>[9]</sup>を

みても幅広いポストが常時掲示されている。アーキビストの職場としても、二千人以上の職員を擁する国立公文書記録管理局(NARA)はじめ各州や郡市町村等のアーカイブズ、大学等の研究機関、ミュージアムやライブラリー、企業、コミュニティ等活躍の場は広い。

### 3 — 認定アーキビスト制度と資格試験

1989年の大会でSAAは、ACAを独立した非営利の認定機関として設立した。それまで、SAAの設置した、認定についての臨時委員会the Interim Board for Certificationが準備を重ねてきていた。1989年いわゆるGrandfather clause(祖父条項)で書類申請による認定が行われたが、それ以降は試験によってのみ認定される。受験のためにはいくつかの道がある。アーカイブズ学の修士号を得たものは、1年間フルタイムでアーキビストの仕事をして試験に合格すれば、資格が得られる。資格試験は、年に1回、SAA大会の時に、大会会場を含めて数か所でペーパーテストが行われる。この試験の受験案内および試験準備の方法はハンドブック[10]に詳細がある。

ACAは2009年に20周年を迎え、資格保持者は1000人を超えた[11]。そのミッション・ステートメントには、「アーキビストであるために必要な知識と能力を定義することによって指導的役割を果たす」[12]とある。それを実現するのがThe Role Delineation Statement for Professional Archivistsの策定である。最近では2009年に見直されているが、ハンドブックのセクション3(p.17-p.24)に詳しく記載されている。

セクション3のはじめに、この記述が、上述のアーキビスト養成の教育ガイドラインに基づいて定義されていることが述べられている。例えば、「アーカイブズのrecordsとpapersは、どのような物理的な媒体であれ、作成者の公的私的といった種別を問わず、行為を遂行する個人あるいは組織によって作成または収受され、保存と未来の利用のためにとっておかれる、記録された情報である。アーカイブズのrecordsとpapersは、社会的文化的記憶であると同様に証拠とアカウントビリティに資する道具でもある。recordsとpapersという語句は、あらゆる媒体(紙、デジタル、オーディオ・ビジュアル)、あらゆるフォーマットで、組織または個人によってつくりだされる記録的証拠を包含して使用される」とある。

次に全般的知識についてのステートメントが13項目に渡ってある。そのあと7つの分野について、タスク及び知識とともに

説明がなされる。7つの分野とは

- 選別、評価、取得
- 編成、記述
- レファレンス・サービスとアクセス
- 保存、保護
- アウトリーチ、アドボカシー、プロモーション
- アーカイブズ・プログラムの管理運営
- 専門職的、倫理的、法的責任

である。

試験は、100問を3時間で解く。解答は4つの中からひとつを選ぶマルチプル・チョイスである。合格ラインは70%前後で、そのときどきに判断している、とシカゴ大会で聞いた。100問は上述の7つの分野から均等に出题される。

問題作成委員会によって作成され、よく吟味された問題が蓄積されていて、その中から出题される。テストそのものはテスト専門機関[13]によって実施、分析される。“現役を退いた問題”が、例題としてACAハンドブックに掲載されている。

### 4 — ACA 試験を受験する

ACA試験を自分が受験することは当初考えていなかったのだが、SAAがDAS(Digital Archives Specialists)認定制度を発足させるというのをきっかけとして、資格がある方がよいのではないかと考え、どんな試験なのか様子を窺うつもりで受験することにした。

資格を得るためには、職務経験が必要であるが、アーカイブズ学の修了者は例外的にprovisional(仮)として受験が許可される。筆者は、2012年の大会参加にあたり、この制度を利用して、オンラインで受験を申し込んだ。必要書類はPDF化して送付し、受験料の50ドルをクレジット・カードで支払った。学習院大学大学院の修士号が米国のそれと同等であると第三者機関によって証明するように、という連絡があった。Josef Silny and Associate, Inc.[14]を紹介され、手続きをした。この証明に140ドル+ACAへの送付に20ドル+往復の送料、そして学習院の英文証明書の発行手数料がかかった。申込のフォームは、小学校からの教育歴を記入し、大学院での学位及び成績証明書を添えるものであった。評価報告書[図1]を郵便で6月半ばに受け取った。同じものがACAのオフィスにも送付され、受験が可能になった。

試験会場は、大会会場のほか、米国各地に何カ所か設営される。数名の受験者がいればどこでも行くというのがシカゴでのブース担当者の言で、東京会場についても相談してみなさい、とのことであった。

試験当日は、大会会場ホテルの会議室の試験会場に、鉛筆三本と消しゴムとパスポートを持って午前8時半に出頭した。試験時間が午前9時から12時までの3時間あったので、じっくり問題文を読むことができた。途中でトイレに立つことは許されたが、そこまでの余裕はなく、ずっと座席で取り組んだ。指示がわからないと試験用紙への記入に困るが、聞き直せば親切に教えてくれる。受験番号は通常、社会保障番号なのだが、それを持たない外国人受験者には独自の番号が与えられた。試験に聞きどりの問題はなくて、普通にアーカイブズ学専攻で勉強していれば十分に合格可能性がある、というのが実際に試験を受けてみての感想である。米国という多くの移民を受け入れた歴史を持つ国ならではの

はの開放性のおかげだろうか、日本からの挑戦にも快く応じてくれた。

## 5 — 受験準備と実際の出題

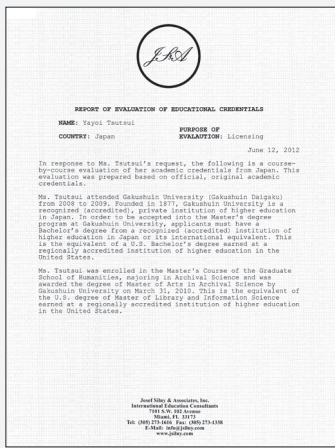
試験の準備について、ACAのホームページにいくつかアドバイスがある。また、ウィキを利用して試験準備を公開しているグループ[15]もある。いずれもACAハンドブックをよく読み、そこにある文献を参考にすること、準備には少なくとも数カ月を要することが記されている。ある合格者はSAAの論文雑誌である*The American Archivists*の過去10年間のバックナンバーを読むことを推奨している。また、シカゴ大会でACAブースにいらした方はファンダメンタル・シリーズを推薦していた[16]。

試験を受けてみて、筆者の個人的所感として、試験準備に推奨することを挙げるとすると、ACAハンドブックを熟読すること、特に例題をしっかりと解くこと、SAAのホームページなどで最近の話題をキャッチしていること、である。例題はそれ自体が出題されることはないが、その問題の扱うトピックは必ず出題されるので、丁寧に読み解く必要がある。さらに少なくともこれだけは読んでおくべきという参考文献を以下に挙げる。

- *Understanding Archives and Manuscripts* や *Preserving Archives and Manuscripts* をはじめとする SAA のファンダメンタル・シリーズ II [17]
- 坂口貴弘「『評価選別』の成立と米国立公文書館」『京都大学大学文書館研究紀要』10号、2012年をはじめとする一連の米国における記録管理、評価選別についての論考
- SAA Code of Ethics 及び Core Values Statement [18]

以上があくまで最低限これだけは、であり、実はそれすら十分に準備できずに試験当日を迎えた。試験問題の印象は、平易な表現の良問がほとんどで、歯が立たない、というようなことはなく、むしろまじめに勉強しておけばよかったのに、と猛省したのであった。

2012年の試験問題が扱った事項を、記憶の中から、ほんの一部紹介しよう。まずはどのような事柄が取り上げられたかを列挙すると



1—学習院大学に対する評価報告書



2—合格通知

- 受入基準
- フォンドの尊重
- マクロ選別
- リーダーシップ
- フランス革命
- 個人情報保護
- 著作権
- ユーザー・スリップ

などであった。

評価選別に分類していいのだろうか、

- ダッチ・マニュアルの著者たち
- H. ジェンキンソン
- T. R. シェレンバーク
- E. ポズナー
- M. C. ノートン

等についての出題があった。ライフ・サイクル論やレコード・コンティニューム論も取り上げられていた。また、構造分析など“機能に基づく”が解答だろう問いが複数あった。

編成記述では

- *Standards for Archival Description*
- *A Glossary of Archival and Records Terminology*
- *More Product, Less Process* (Greene and Meissner)
- MARC
- DACS
- EAD

などが出題された。

法制度では、

- FOIA (Freedom of Information Act 情報公開法) の適用範囲 (サンプル問題を参照すると、“連邦機関の一部”が正答とわかる)
- 企業アーキビストが公開に応じない場合の法的根拠

保存論は、紙資料に限らず、環境にまで及び、技術用語や化学の専門知識を要した。

- フィルムの構造と保存
- 凍結保存法
- 木製書棚に適切な塗料
- 水損オーディオテープの対処法
- 紙資料の保存に適切な環境 (華氏で表示)

などが問われ、7つの分野では一番難易度が高いと感じた。

面白いところでは、

- NAGARAとは、どのような団体か? (全国政府アーカイブズ記録管理者協会)
- *Archival Outlook* の出版者は? (SAA)

といった、北米では常識、のようなプレゼント問題もあった。

倫理綱領については、具体的なケースで尋ねてくる。また、コレクション・ポリシーについての問いも複数あった。たとえば、ある大学のアーカイブズで同窓会の有力者が自分の個人記録を寄贈したい、と言う。それは、残念ながらポリシーには見合わないが、どう対応するか、という問題など、コレクション・ポリシーに適合しない寄贈申出にどう対応するか、を聞かれた。

電子記録や大量デジタル化、電子記録の保存についても出題された。また、利用者の分析などマーケティングのようなことも問われた。

以上挙げたことは、記憶に残ったものに過ぎず、全体から見れば偏った一部にすぎない。しかしここから垣間見られる、専門職アーキビストの認定を目的として作成された問題を解くことは、アーキビストとしての資質、知識を再認識する良い機会であると思われた。また、資格更新のため筆記試験を5年毎に受ける必要がある。

## 6 — おわりに

2012年のACA試験の合格点は68点だった。筆者の得点は幸いこの点数を上回った。勤務証明を提出し、年間50ドルの登録料を支払えば、CAと名乗ることができる。[図2]

一連の体験から日米の制度上特筆すべき相違点を挙げておきたい。

- 米国では試験による認定が行われ、日本では学歴や履修の証明書と自己申告に基づく業績報告書に基づく書類審査による。

- 導入時に米国の制度は、Grandfather clauseによって長年アーキビストとして奉じているベテランに対して一度だけ書類申請のチャンスを与えた。JSASがパブリックコメントを募集したときに「建築士制度発足時のように、既存の人に無条件で(もしくは優遇して)資格を与えることは必要である」という意見もあった[19]が、今年度の発足にあたっては採用されなかった。
- 1年間(学位によって年限は異なる)の勤務実績について、米国の制度は時間数で計り、その証明を雇用者が行う。類縁機関(博物館や図書館)での業務は半分の時間として数える。これに対して、JSASの制度は、週4日勤務を標準とし、年に換算して自己申告する。

ACAのミッション・ステートメントや試験問題には、明確なアーキビスト像が描かれ、職務範囲もより細かく規定されている印象がある。米国での認定制度がスタートしてしばらくは、誰が運営上の責を担うかが論議され、また財政上の困難といった問題を抱えていた[20]。SAAの主だった人物が皆認定資格をもち、名刺などにCAの称号を学位の横に記載している様子は資格認定制度の認知・拡大に寄与していると考えられる。米国の制度発足が二十余年前であることに鑑み、それだけの時間をかけて熟成するのか、その時間を一気に縮めて追いつき追い越すような制度設計にしていけるのか、JSASの認定制度の今後が期待される。このような報告の機会を頂いたことに感謝しつつ、私自身は、アーキビストであることに見合うよう、努めたい。

ふあいるアーカイブズ学における大学院課程の指針、『記録と史料』13号、2003年

8 — SAA, "Directory of Archival Education", <http://www2.archivists.org/dae> (2012年12月5日) このページには北米の教育機関38校の名称とリンク、連携教育機関の説明へのリンクがある。米国の教育制度については、日本アーカイブズ学会2009年度第1回研究集会での岡本信一氏(内閣官房公文書管理検討室:当時)「公文書管理『新時代』における専門的人材の育成に向けて——米国情報大学院(i School)が新しい時代を切り拓く」がある。

9 — SAA, "SAA Online Career Center", <http://www2.archivists.org/groups/saa-online-career-center> (2012年12月5日)

10 — ACA, "ACA Handbook", <http://www.certifiedarchivists.org/get-certified/exam-handbook.html> (2012年12月5日)

11 — ACA, "20 Years and Growing: A presentation presented at the ACA's 20th Anniversary Celebration in 2009", [http://www.certifiedarchivists.org/images/history/20th\\_anny.pdf](http://www.certifiedarchivists.org/images/history/20th_anny.pdf) (2012年12月5日)

12 — 前掲「ACA Handbook」p.5

13 — Capitol Hill Management Services, Inc., <http://www.caphill.com/displaycommon.cfm?an=1&subarticleid=24> (2012年12月5日) 設立当初はProfessional Examination Service, <http://www.proexam.org/> (2012年12月5日) を用いていたが、財政上の理由から一本化した。

14 — Josef Silny and Associate, Inc., "Josef Silny and Associate, Inc." <http://www.jsilny.com/> (2012年12月5日)

15 — the CAwannabe study group, "the CAwannabe study group" [http://scratchpad.wikia.com/wiki/CAwannabe\\_CA\\_Exam\\_Study\\_Wiki](http://scratchpad.wikia.com/wiki/CAwannabe_CA_Exam_Study_Wiki) (2012年12月5日)

16 — この方は、一度試験に落ちたと告白して下さり、二度目はファンダメンタル・シリーズ(註17参照)を熟読することで合格を勝ちえたと教えて下さった。ベテランのアーキビストにも難しい試験であると認識し、逆に気が楽になったものである。

17 — ファンダメンタル・シリーズ、現在はそのIIが刊行され、完結した。

Michael J. Kurtz, *Managing Archival and Manuscript Repositories*, Society of American Archivists, 2004. Richard Pearce-Moses, *A Glossary of Archival and Records Terminology*, Society of American Archivists, 2005. Mary Jo Pugh, *Providing Reference Services for Archives and Manuscripts*, Society of American Archivists, 2005. Frank Boles, *Selecting and Appraising Archives and Manuscripts*, Society of American Archivists, 2005. Kathleen D. Roe, *Arranging and Describing Archives and Manuscripts*, Society of American Archivists, 2005. James M. O'Toole and Richard J. Cox, *Understanding Archives and Manuscripts*, Society of American Archivists, 2006. Mary Lynn Ritzenthaler, *Preserving Archives and Manuscripts (2nd ed.)*, Society of American Archivists, 2010.

18 — SAA, "Code of Ethics and Core Values Statement", <http://www2.archivists.org/statements/saa-core-values-statement-and-code-of-ethics> (2012年12月5日)

19 — 日本アーカイブズ学会, "パブリックコメント「日本アーカイブズ学会登録アーキビスト(仮称)」資格認定制度創設について(提案)」に対するパブリックコメント", <http://www.jsas.info/modules/news/article.php?storyid=94> (2012年12月5日)

20 — Elizabeth W. Adkins, "Academy Growing Pains: Reorganization and Implementation of Dues", <http://www.certifiedarchivists.org/about-us/history/34.html> (2012年12月5日)

1 — 日本アーカイブズ学会, "学会登録 アーキビスト資格認定の申請(12月1日から31日まで)", 最新ニュース, <http://www.jsas.info/modules/news/article.php?storyid=115> (2012年12月5日)

2 — 日本アーカイブズ学会2011年度第1回研究集会(7月16日(土)開催)「アーキビスト資格制度の実現に向けて:学会提案を議論する」

3 — the Society of American Archivists, "the Society of American Archivists", <http://www2.archivists.org/> (2012年12月5日)

4 — Academy of Certified Archivists, "Academy of Certified Archivists", <http://www.certifiedarchivists.org/> (2012年12月5日)

5 — James M. O'Toole & Richard J. Cox, *Understanding Archives and Manuscripts*, Society of American Archivists, 2006, pp.63-64

6 — 2009年から2011年SAA大会参加記は、アートドキュメンテーション学会[JADS通信]91号、2011年10月、pp.10-14に掲載している。

7 — SAA, "Guidelines for a Graduate Program in Archival Studies", <http://www2.archivists.org/gpas> (2012年12月5日)、保坂裕興訳「資料